文化財愛護
シンボルマーク

タテチョウ遺跡

昭和60年 3 月

松江市区画整理課
松江市教育委員会

凡　　例

1. 本書は昭和59年度において松江市教育委員会が、松江圏都市計画北部土地区画整理事業施工予定地内に所在するタテチョウ遺跡の一部を発掘調査した概要の報告書である。
2. 発掘調査事業の組織は下記のとおりである。

依　頼　者	松江圏都市計画北部土地区画整理事業施行者
代　表　者	松江市長　中　村　芳二郎
調査主体者	松江市教育委員会
	教育長　内　田　　榮
事　務　局	区画整理課
総　　括	区画整理課長　森　　弘　武
	区画整理課北部工務係長　渡　部　公　行
	同　係　主事　森　　安　司
庶　　務	文化係主事　中　尾　秀　信
担　当　者	松江市教育委員会社会教育課文化係長　岡　崎　雄二郎
	松江市立女子高校常勤講師　井　上　寛　光

3. 本書の編集は主として、井上寛光が行ない、岡崎と中尾がこれを助けた。
4. 発掘調査に当たっては下記の作業員の方々の参加を得た。

明石　清、奥田安昭、佐々木満喜夫、土井功吉、牧野益蔵、松本克義、近藤萬吉
立原隆一、永島重雄、仲田裕朗、青木昭夫、岩成萃子、岩成礼子、金坂みどり
清水末子、山野洋子、田中ケイ子、佐々木久子、牧野幸枝

5. 出土遺物の実測と考察に当たっては、萩雅人、今岡一三、佐々木稔、黒田研治、瀬古諒子の協力を得た。

目　　次

Ⅰ　位置と歴史的環境 …… 1
Ⅱ　調査に至るいきさつ …… 3
Ⅲ　調査の概要 …… 4
Ⅳ　小　結 …… 24

I　位置と歴史的環境

タテチョウ遺跡は松江市の市街地の東北方、西川津地内に流下する朝酌川の流域に広がる大規模な遺物包含地である。

遺跡の大半は河川敷と水田下に所在し昭和９年朝酌川の堰設置工事に伴ない土器片などが出土したことからその存在が明らかとなり、昭和24年３月山本清氏の手によって一部試掘調査が行なわれた。その結果出土遺物は縄文、弥生、古墳の各時代にわたる複合遺跡であることが分かり、特に当時あまり知られていなかった弥生時代前期の土器が認められたことから学界の注目するところとなった。

ところが、このタテチョウ遺跡を含む一帯の朝酌川について県土木部河川課では河川改修事業を実施することになり、そのため島根県教育委員会では昭和49年度に遺跡の範囲を確認するための予備調査を実施した。(注２）その結果、縄文、弥生、古墳の各時代の土器に加え木製品なども出土し遺跡の範囲は最低南北 300 ｍに及ぶものであることが判明した。

一方松江市の計画した北部土地区画整理事業区域内の基幹道路にも本遺跡が該当することから松江市教育委員会も昭和49年から同50年にかけて試掘調査を実施し、縄文から歴史の各時代にわたる土器、木器、石器類を発見した。

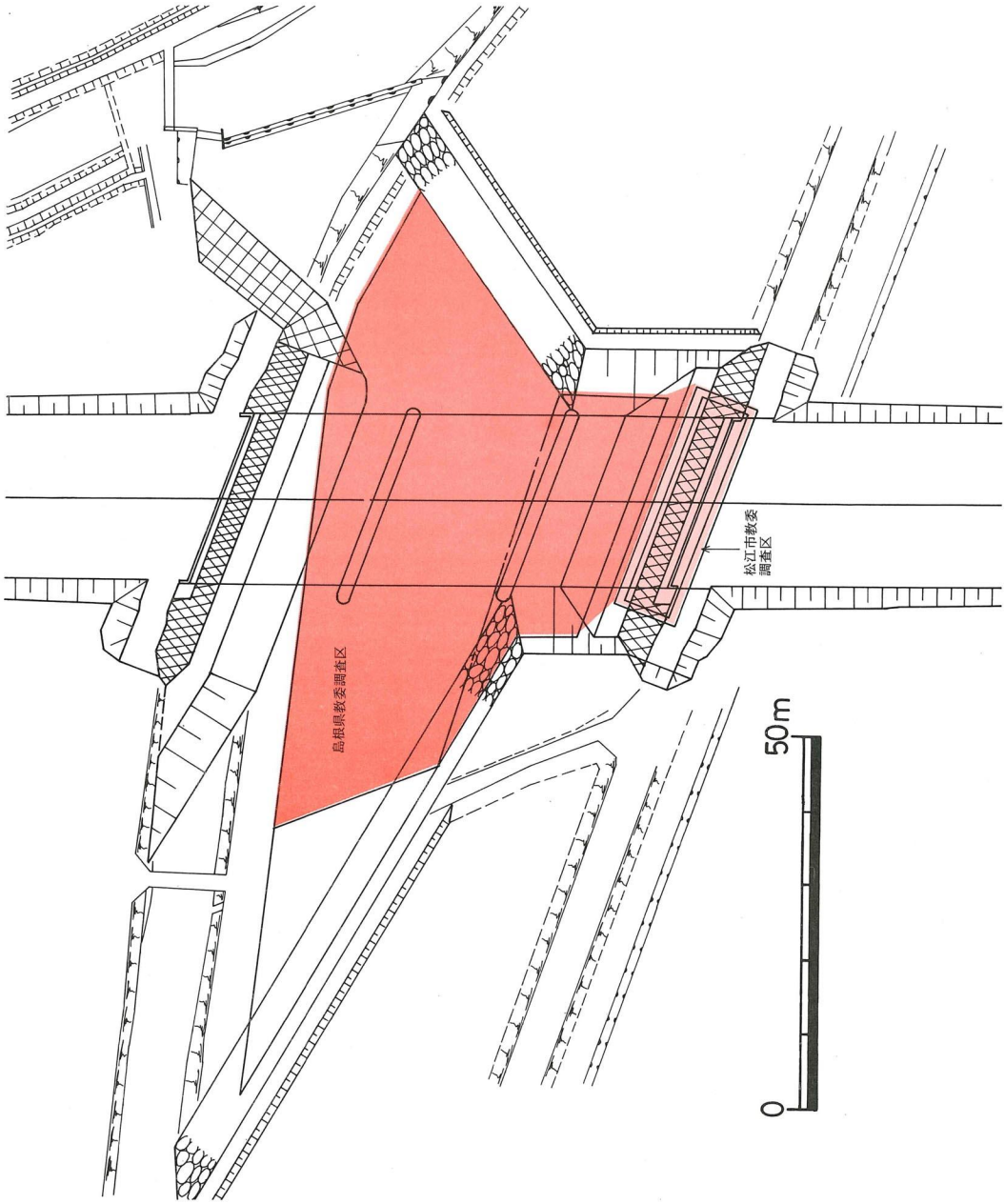
昭和52年度には県教委が先きに予備調査した部分を中心に本格的な調査が開始され各時期各種のぼう大な量の遺物の出土があった。本遺跡は朝酌川が北方持田平野から西南方向へ流下して大橋川へ合流するその中間点に所在し現在ではその主要部分は東西南北約 400 ～ 500 ｍにわたるものと推定されている。遺物を包含している砂礫層は海抜０ｍから－0.4 ｍのかなり低い位置にある。縄文時代の遺跡としては西川津遺跡、金崎遺跡が挙げられる。

西川津遺跡は持田地区に寄った所謂貝崎地区の同じ朝酌川河川敷に所在し現在調査中であるが縄文時代早期から始まる各時期の遺物が出土し弥生時代のヤマトシジミの貝塚や弥生時代の掘立柱建物跡（ドングリの貯蔵施設、ヒョウタンの種子を多量に含む土壙、陶磌（土笛の一種、獣骨製釣針）が発見され、生活の場であることが判明している。

金崎遺跡は金崎古墳群中にあり縄文晩期のカメ形土器１個体分が単独出土している。遺構は不明である。

弥生時代になると「タテチョウ」「西川津遺跡」以外にも「島根大学構内遺跡」などが点在し、その数を増す。低湿地帯のかなり広い範囲で農耕生活が始まったことが知られる。

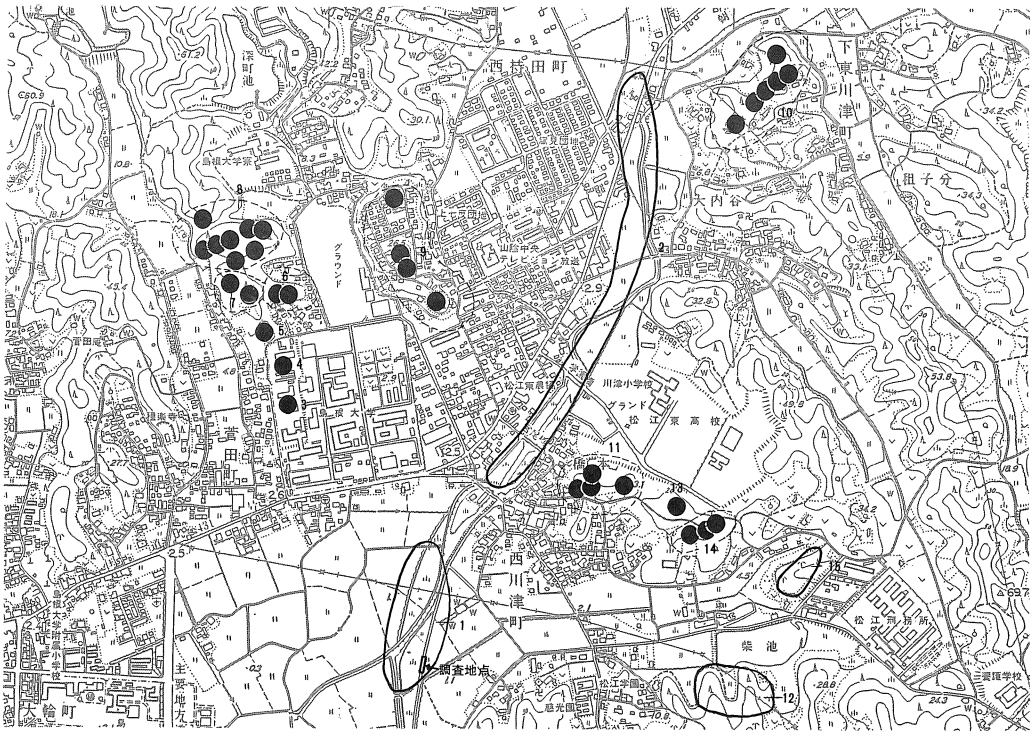
古墳時代になると近くでは前期古墳はあまり知られていないが土器を出土する遺跡は多



第２図　道路工事計画と調査の関係平面図

く「柴遺跡」や「堤廻遺跡」などで前期の住居跡が確認されている。中期になると「史跡金崎古墳群」「山崎古墳」「柴古墳群」が知られている。

金崎古墳群の内、第１号墳は、全長35*m*の前方後方墳で後方部に竪穴式石室を有し古式の須恵器や鏡、玉類、子持勾玉、鉄製武器類を副葬し当地区の盟主墳的な古墳として知られている。



1. タテチョウ遺跡　2. 西川津遺跡　3. 薬師山古墳　4. 菅田丘古墳
5. 小丸山古墳　6. 宮田古墳群　7. 浜弓古墳群　8. 上浜弓古墳群　9. 金崎古墳群
10. 貝崎古墳群　11. 馬込山古墳群　12. 堤廻遺跡　13. 山崎古墳　14. 柴古墳群
15. 柴遺跡

第3図　周辺の主要遺跡

奈良時代に至っても「タテチョウ遺跡」からはその時期の土器が多く出土しており山間の谷間に農耕を主体としたムラがいくつか出来ていたことは確かである。

「出雲国風土記」によれば、当地区は島根郡の山口郷あるいは法吉郷の一部であるが、その時代にはまだ宍道湖の一部であったと思われる。

遺跡の上に水田が開発されることになるのはそれからおよそ1000年近く後の江戸期に入ってからのことであろう。

Ⅱ　調査に至るいきさつ

松江市の人口は近年微増化の傾向にあり、特に西川津地区は既成市街地に隣接した区域で市街地の無秩序な拡大化が著しい低湿水田地帯である。そのため松江市ではこの地区の公共施設の整備改善を成し健全な市街地造成と宅地の利用増進を図ることを目的として水田地帯126 haを対象に「松江圏都市計画事業北部土地区画整理事業」を実施中である。

この事業の施行に伴ない、昭和59年度からは区域内の基幹道路である都市計画街路３、３、59号線（菅田美保関線）の内、朝酌川に橋梁を架設する部分に埋蔵文化財包蔵地（タテチョウ遺跡）の該当することが判明したので、県文化課、県河川課と鋭意協議した結果、朝酌川の河川敷の内、暫定掘削する部分については県文化課、堤防部分については松江市教育委員会がそれぞれ発掘調査を実施することになった。

区画整理課からは昭和59年４月６日付区第47号をもって教育長宛依頼があった。

教育委員会としては現在の調査体制では十分に対応しきれないことから松江市立女子高等学校の常勤講師である井上寛光先生（考古学専攻）を調査主任とするなどして体制を整え昭和59年４月９日付松教社第 152 号をもって区画整理課へ調査を実施する旨回答した。

発掘調査の実施にあたっては、当初昭和59年５月28日から同年８月31日までのおよそ３ケ月余りを計画していたが実際には遺構が全く確認されず、出土遺物も予想外に少なかったことから昭和59年６月13日から同年７月25日までの内計30日間を要してこれを完了した。

Ⅲ　調査の概要

1.　遺跡の概要

今回の調査では、無遺物層である第１～第５層を重機で除去した後行なった。調査区の設定は、県教育委員会にならい、N（北）・E（東）の方向と数字を組み合わせたもので表わし、10 m × 10 m グリットの北東隅の杭をグリッド名とした（第２図）。

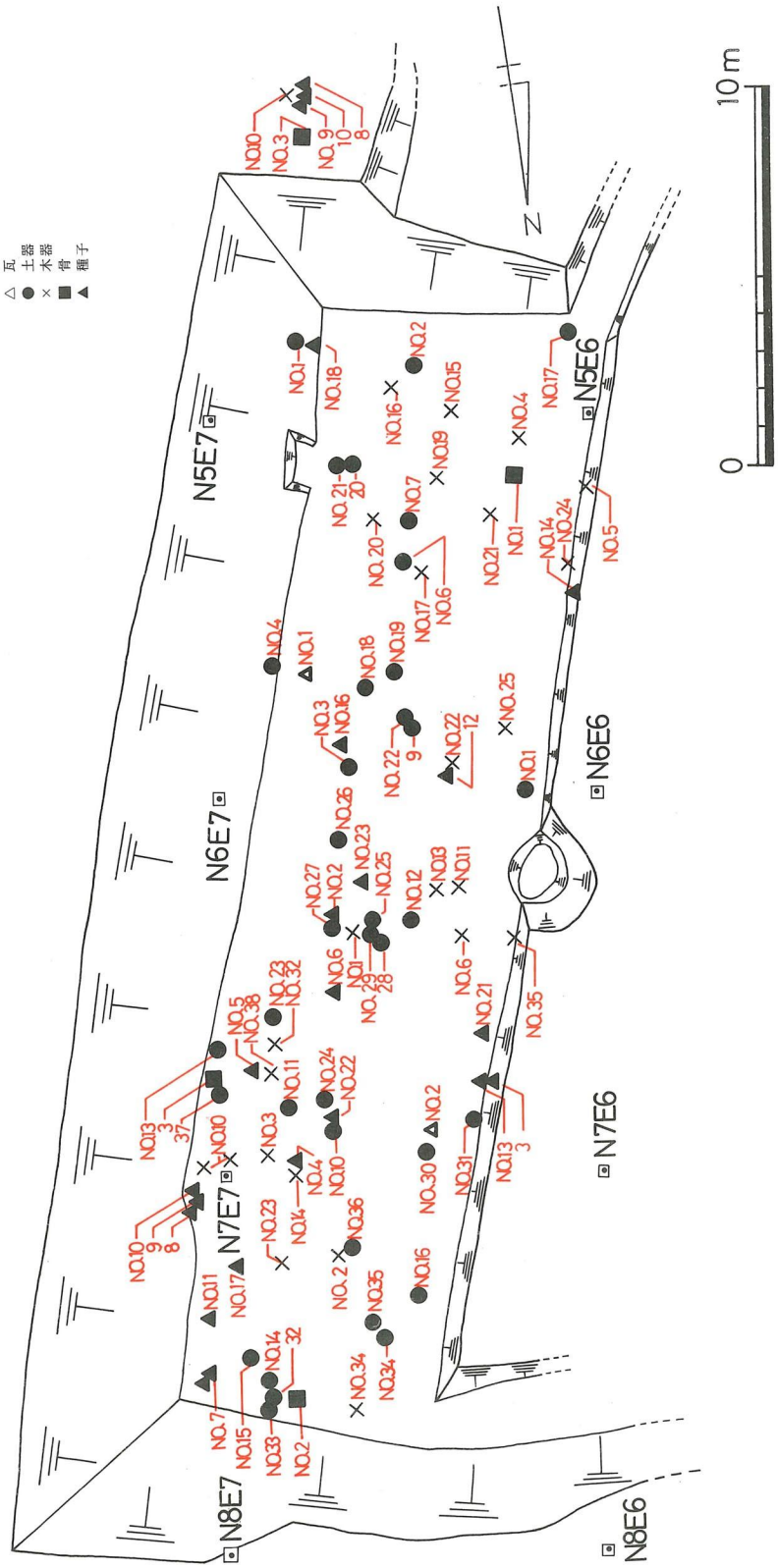
しかし、今回の調査では、遺構の確認はできなかったため、ここでは、層序による遺跡の概略を記す（第３図）。

堆積した土砂はかなりの厚みを持つが、第４層までは道路設置に伴い搬入した土砂で、堆積した土層は第５層から第14層までで、以下、ヤマトシジミの死貝を含む無遺物層（第15層）となる。このうち、遺物を含むのは第７層から第14層までで、厚さ10㎝から40㎝程の砂質土層と粘質土層とが交互に平行状態に堆積している。

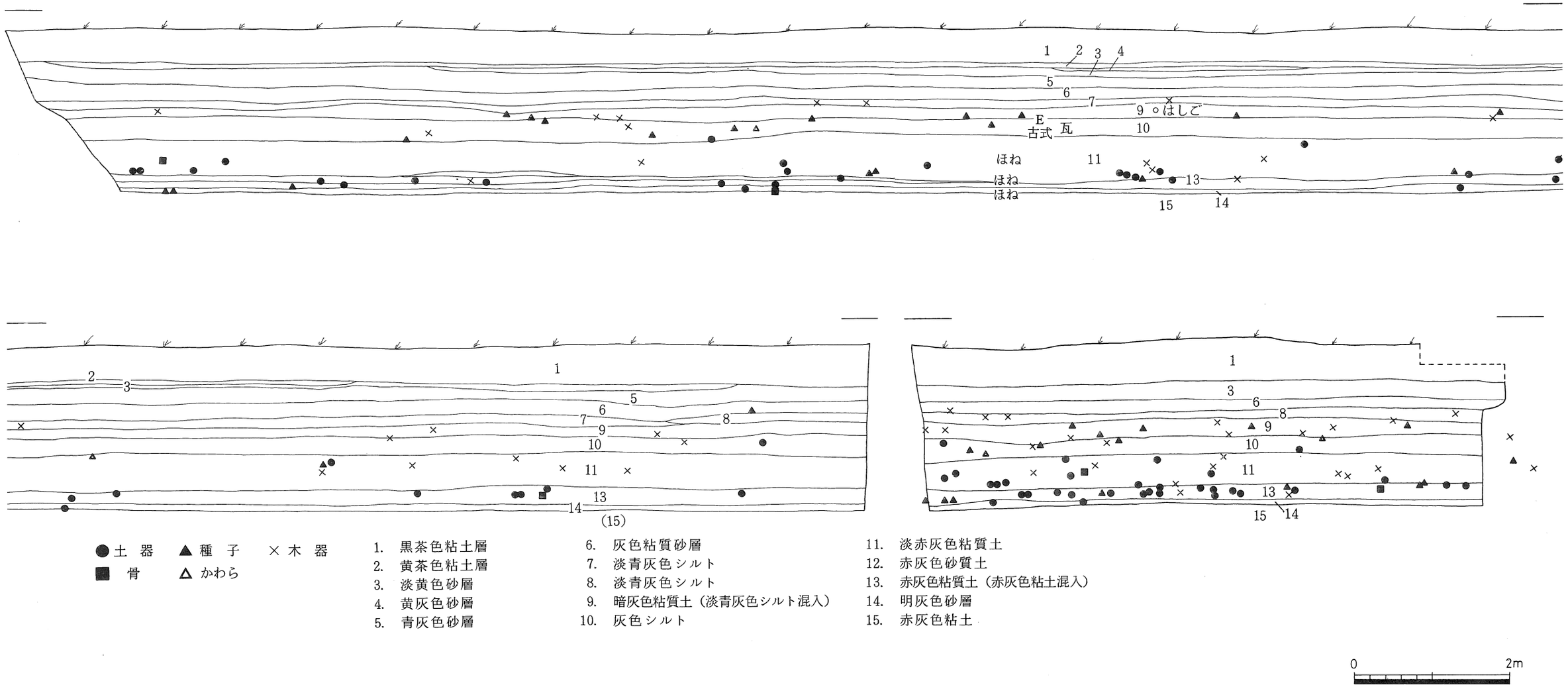
第７層は、厚さ10㎝程で、南側へいくに従って薄くなっており、南側土層図にはない。この層の中位の層位より、鍬と思われる木器が検出されている。

第９層は、厚さ10㎝から30㎝程を計り、調査区全面に堆積している。この層より紡織具と思われるもの、用途不明の木器が検出されている。

第10層は、厚さ20㎝程を計り、調査区全面に堆積している。この層より、古式土師器片、把手状木器、鍬状木器などが検出されている。



第４図　遺物出土状態平面図



●土 器　▲種 子　×木 器
■ 骨　△かわら

1. 黒茶色粘土層
2. 黄茶色粘土層
3. 淡黄色砂層
4. 黄灰色砂層
5. 青灰色砂層
6. 灰色粘質砂層
7. 淡青灰色シルト
8. 淡青灰色シルト
9. 暗灰色粘質土（淡青灰色シルト混入）
10. 灰色シルト
11. 淡赤灰色粘質土
12. 赤灰色砂質土
13. 赤灰色粘質土（赤灰色粘土混入）
14. 明灰色砂層
15. 赤灰色粘土

第５図　遺物出土状態・土層断面図

第11層は、厚さ40㎝程を計り、全面に堆積している。この層より、縄文時代晩期の土器、弥生時代中期の土器や槌、建築木材などが検出されている。

第12層は、厚さ10㎝程を計り、北側に堆積し、南側の土層図には認められない。この層より、弥生時代前期の土器が検出されている。

第13層は、北側では10㎝、南側では20㎝の厚みを計り、北側に薄く堆積している。この層の下端では、一部木片が薄い層をなしている。この層より、縄文時代晩期・弥生時代中期・後期の土器が検出されている。

第14層は、調査区全面に厚さ８㎝程薄く堆積している。この層よりは、縄文時代晩期・弥生時代前期の土器が検出されている。

以上、各土層の概略と遺物の出土状態を記してきた。ここで言えることは、第７層から第14層は各時代の遺物が混在して、遺物と層位との関係は捉えるのが困難であるということである。

2. 出土遺物の概要

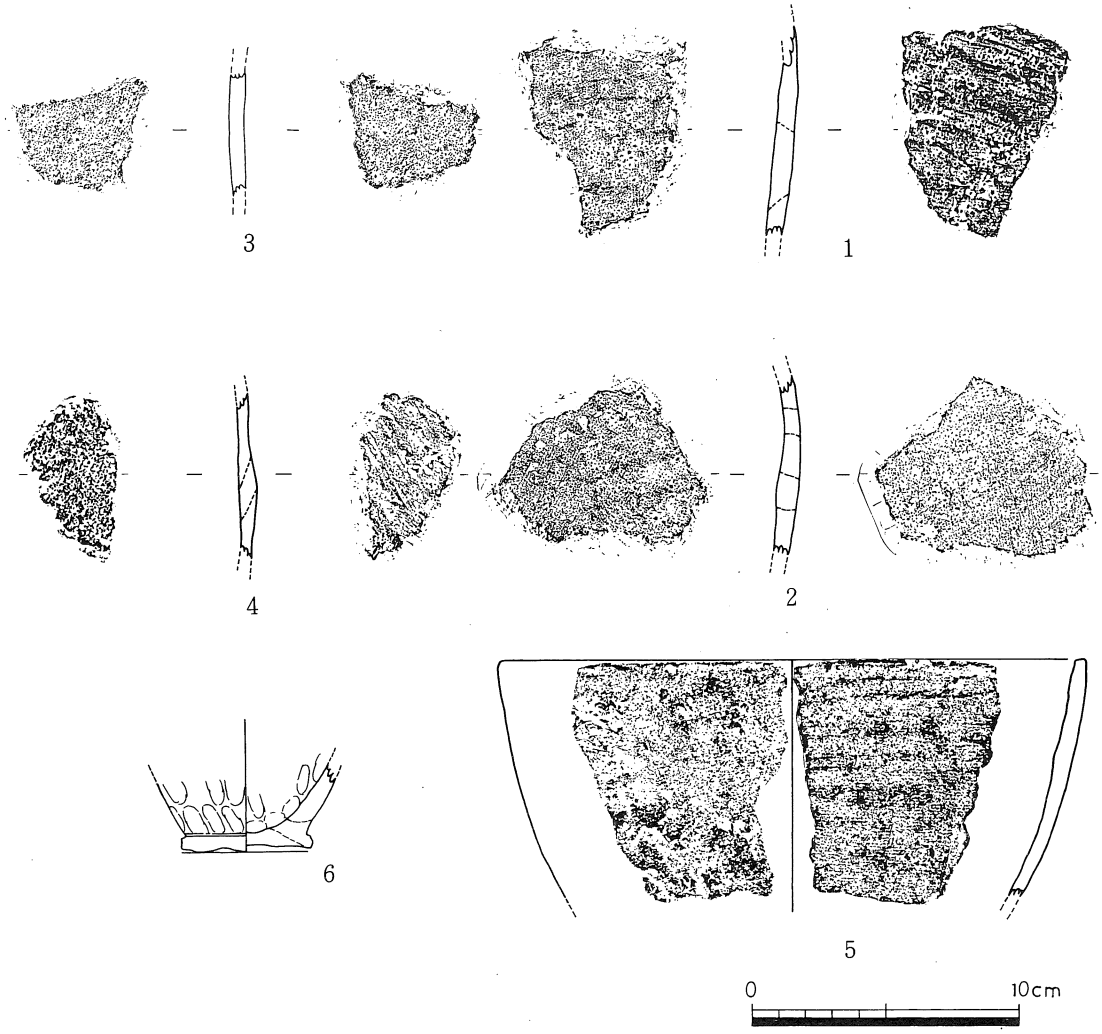
若干の遺物が調査区内の堆積土中に包含されていた。以下、特徴的なものを、縄文式土器、弥生式土器、土師器、木製品、瓦、その他の遺物について説明する。なお、挿図番号後の(　)内の数字は、遺物出土状態平面図の数字と対応する。

1. 縄文式土器

縄文式土器は、細片ばかり６点検出したが、全て晩期の粗製土器である。胎土は共に、２～４㎜の白色砂粒を多く含み、器面はザラザラしている。第６図の１(8)と４（排土中より出土の為、遺物平面図への記入なし）の外面は、斜方向のケズリが重複して施され、内面はナデで調整されている。２(27)と３(4)は、内外面ともにナデで調整されている。５(25)は、22.2㎝を計る甕の口縁部片で、ゆるく内傾しながら立ち上る。口縁部内面には、横方向のケズリが２～３条施されている。外面は、磨滅が激しく不明だが、ナデ調整だと思われる。６(15)は、推定底部径５㎝を計る。上げ底でその外側端部が外に張り出し、それからゆるく外反しながら立ち上るものである。器面には、指頭圧痕が明瞭に残っている。なお、１は第13層、２は第11層、３は第14層、４は排土中、５は第11層、６は第11層より出土している。

2. 弥生式土器

今回の調査で出土した弥生式土器のほとんどが、破片の状態で出土しており、時期や器種の推定しえるものは、ごく一部しかなかった。又、破面および器面の磨滅が激しく、



第６図　遺物実測図(1)

調整痕や文様の不鮮明なものが多かった。この内、形態や文様に特徴のあるものを選んで概要を記すことにする。

前期の土器

器種として、壺形土器、甕形土器、蓋形土器がある。

７図－１(37)は、口縁部がゆるく短く外反し、頸部が「八」字状に開き、頸部に２条、頸部と肩部の境に２条以上のヘラ描沈線を入れる。調整は、内外面ともていねいなヘラ磨きを行ない、全体的にていねいな仕上がりである。又、焼成もよく、胎土中の砂粒もほとんど目立たない。

７図－２(3)は、胴部から肩部にかかるところしか残存しないが、肩部で肥厚し、頸部へ

と続く形状である。文様は、頸部と胴部の境になると思われる。ヘラ描沈線を2条以上いれ、アクセントをつける。

7図－3(16)は、全体的に器厚がうすく、内外面とも、ヘラ磨きを施す。文様は、胴部に、3条のヘラ描沈線を波状にめぐらす。胎土は、3㎜の砂粒をかなり含み、焼成は良好。

7図－4(34)は、口縁が短かく外反し、小さな稜をもつ。胴部は、張りがなく、底部に向ってゆるやかにすぼまる形状である。胴部に沈線等の文様はなく、内外面ともに、ハケ目調整を施す。

7図－5(36)は、口縁が短かく外反し、胴部がわずかに張出す。頸部に3条のヘラ描沈線を施し、外面は、沈線から上がヨコナデ、下が縦方向のハケ目、内面は、ナデ調整をする。

7図－6(17)は、蓋形土器の唯一の出土例である。ここでは、前期として扱ったが、中期の可能性もある。中凹みのつまみをもち、底面に向って大きく末広がりになる。外面は、つまみ近くがナデ、裾部はヘラ磨き、内面はナデ調整。

中期の土器

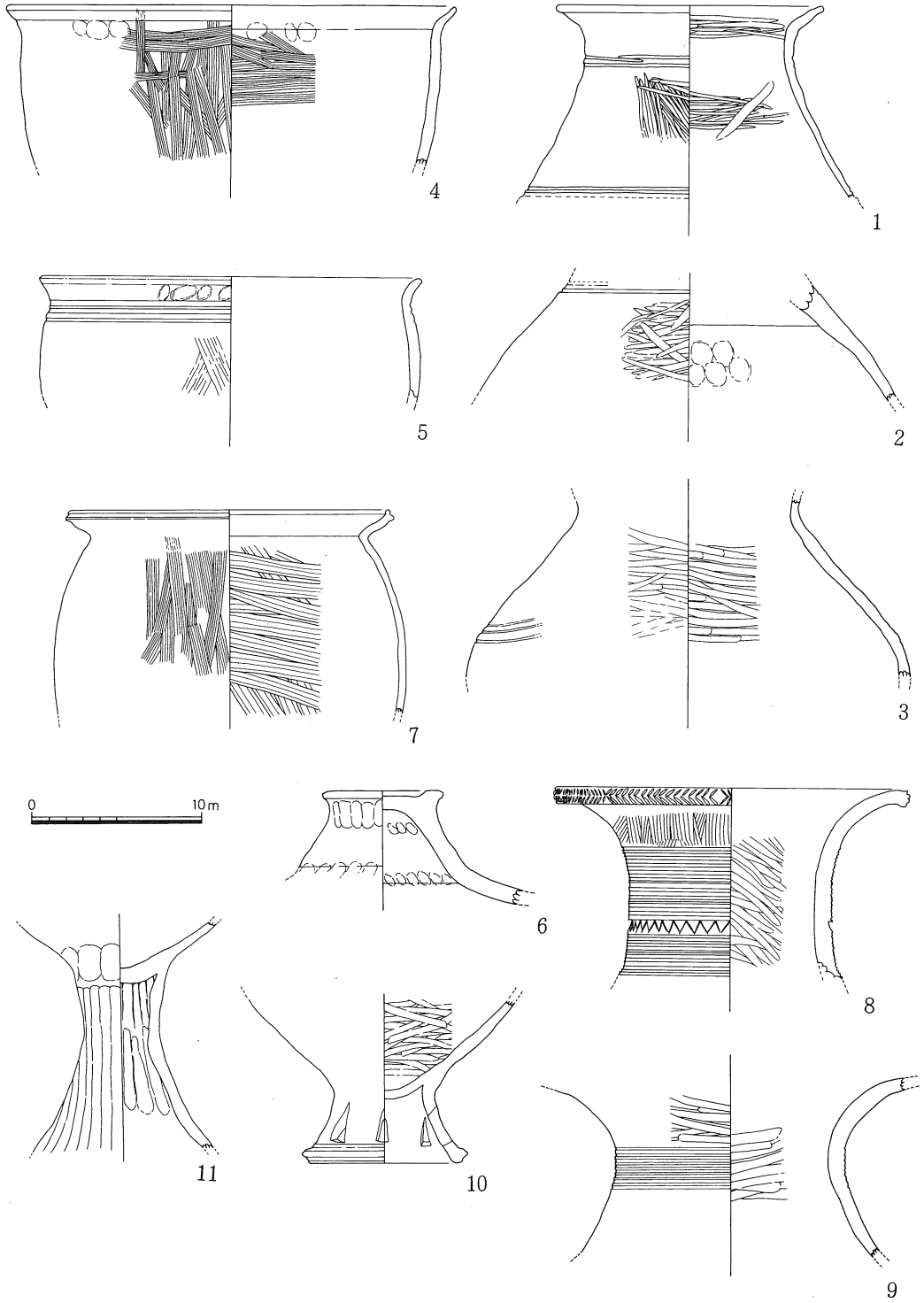
器種として、壺形土器、高坏形土器がある。

7図－8(5)は、口縁が大きく朝顔形に外反し、口唇部の外面には、ヘラ状工具による羽状文を施す。この羽状文は、一定の方向ではなく11～17ずつの単位で交互に刻まれている。頸部には、櫛状工具による平行沈線が20条と15条以上施され、その間に、ヘラ状工具による三角刺突文が施されている。外面頸部は、縦方向のハケ目、内面は、口縁部がヨコナデ、頸部にヘラ磨き痕を残す。

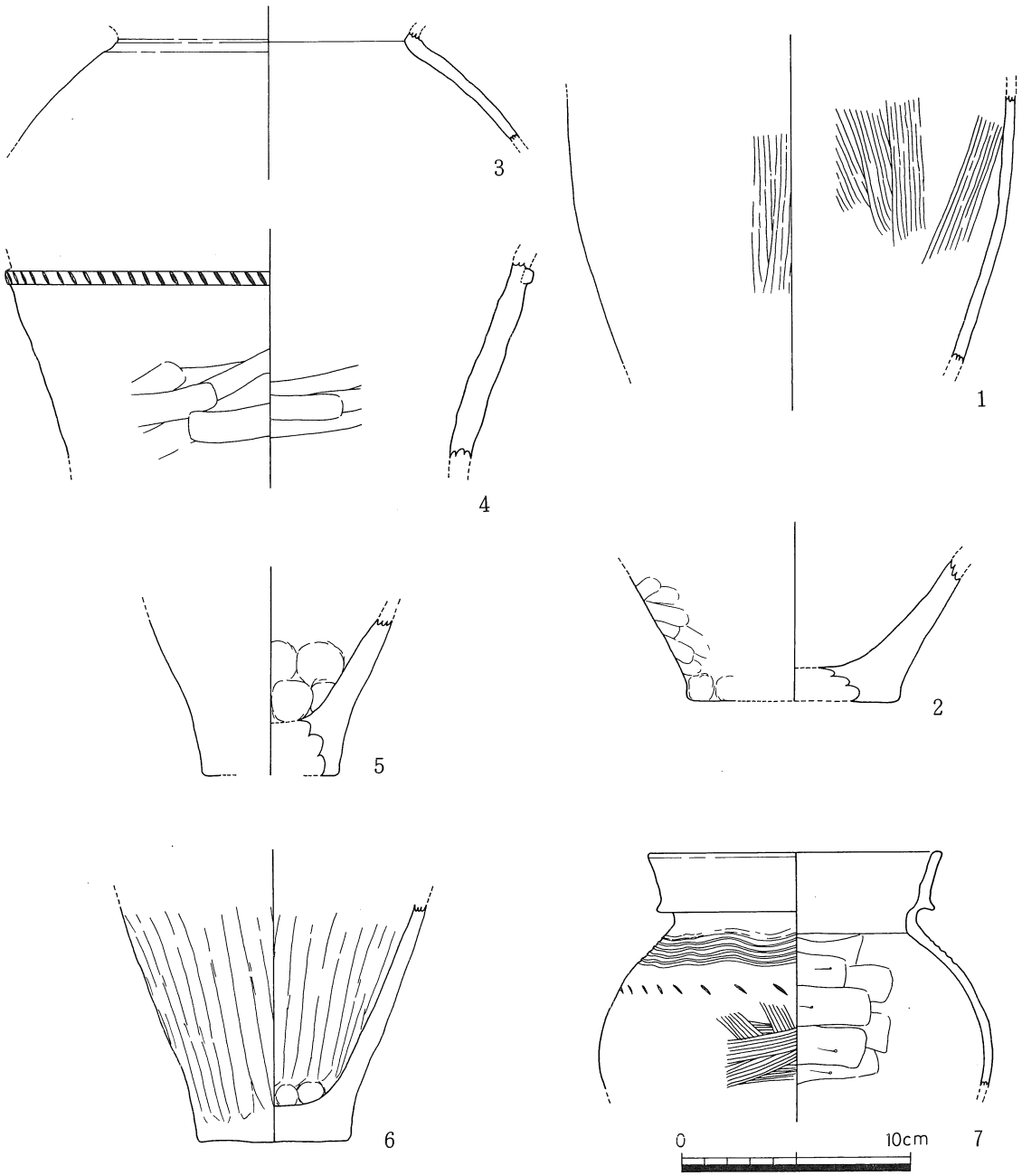
7図－9(31)は、頸部から口縁にかけての破片である。口縁部に近づくに従って肥厚し、大きく外反していく形状である。頸部には、櫛状工具による8条の平行沈線をめぐらし、外面は、ヘラ磨き調整する。内面は、胴部にかかるところの磨滅が激しいが、口縁部近くは、ヨコナデ、頸部から胴部にかけては、ヘラ磨きと思われる。

7図－10(22)は、低い脚部に、透し孔が3㎝余りの間隔で、7ケ所に設けられており、内、外面ともナデ調整。杯部外面は、磨滅が激しくよくわからないが、内面は、ヘラ磨き調整する。

7図－11(24)は、高杯形土器の杯底部から、脚部にかけての破片である。円板充填法で脚部内面には、絞り痕を残す。



第７図　遺物実測図(2)



第８図　遺物実測図(3)

７図－７(28)は、頸部が「く」の字状に屈折し、ややくりあげ気味につまみあげられた口縁部に、一条の凹線文を入れる。内外面ともハケ目調整し、器内はうすく、焼成は良好。

この他、時期はわからないが、器種のわかるものでは、壺又は、甕の底部〔８図－２(23)、５(26)、６（排土中より出土の為、遺物平面図への記入なし）〕、刻目の入った突帯

をつける甕の胴部〔８図－４(7)〕等がある。

以上、主だった弥生式土器の概要を記したが、これらは全て、各時代の土器が混在した遺物包合層から出土したもので、原位置を失っているものと考えられる為、それぞれの共伴関係は不明である。

3. 土　師　器

今回の調査では、１個体が出土した。土師器もまた、時期の混在した包含層からの出土である為、共伴関係は不明である。

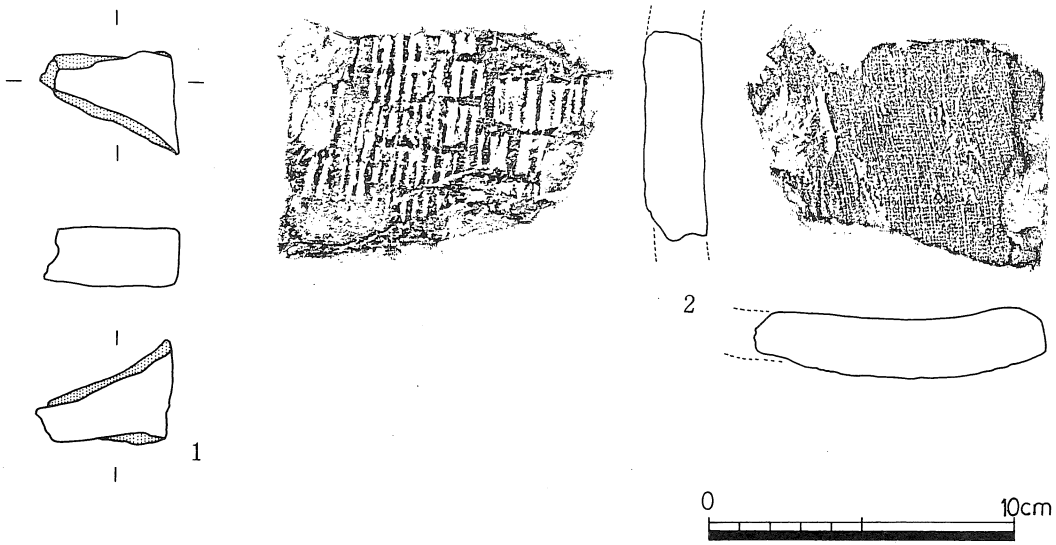
８図－７(30)は、「５」の字状の整正な複合口縁を有し、胴部が倒卵形に近い形状をなし、肩部には、櫛状工具による６条以上の波状文、胴部には、刺突文を施す。口縁部は、ヨコナデで、胴部外面は、多方向のハケ目調整。内面は、頸部以下はヘラケズリで、器形は、薄く作られている。

4. 瓦

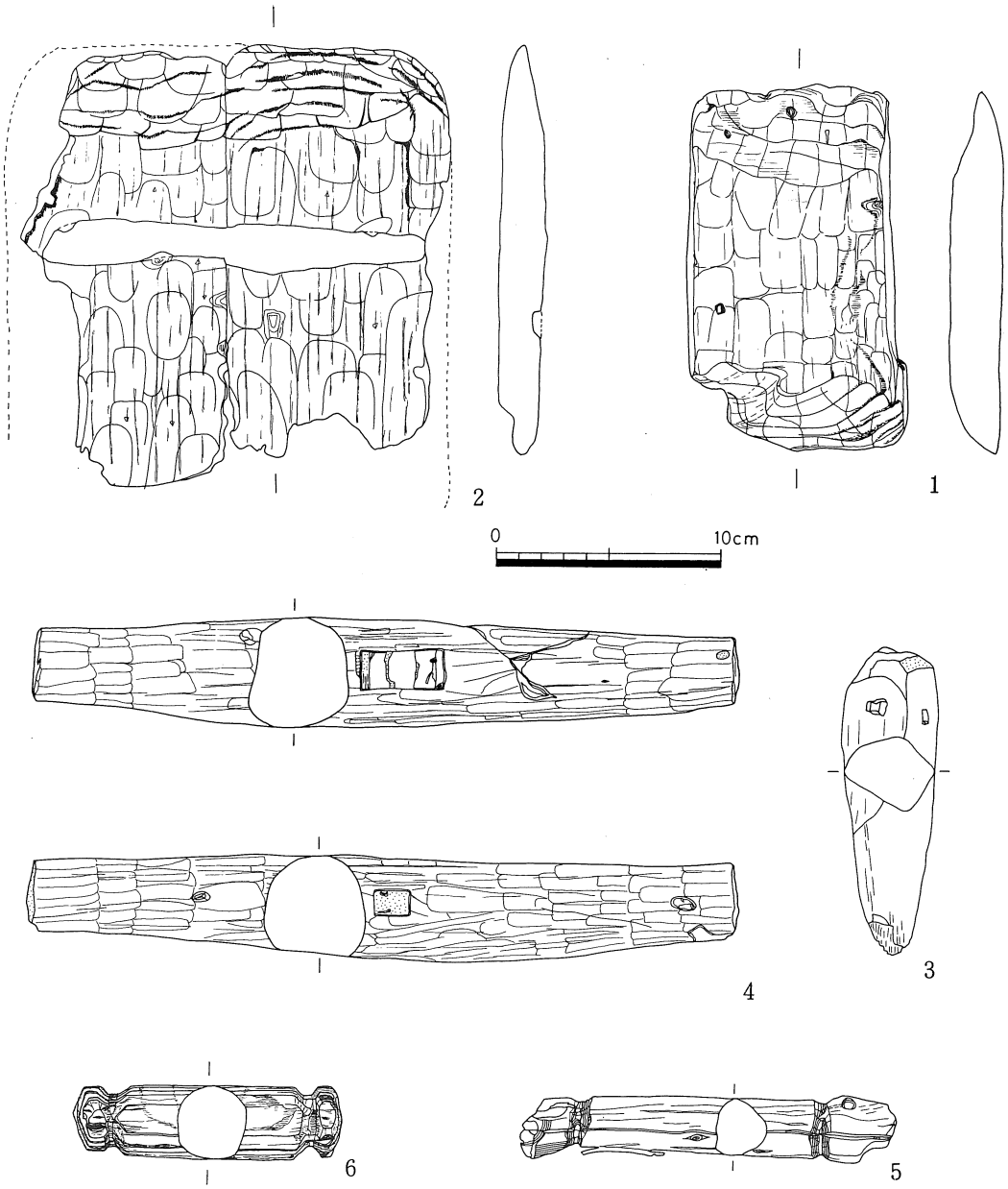
タテチョウ出土の瓦は、２点あり、いずれも瓦の小破片である（第７図1.2）。

第９図－１(1)は、4.5 × 2.5 ㎝、厚さ 1.9 ㎝の小破片で第11層より出土。叩き痕を残さず、両面ともナデ調整が施されている。

第９図－２(2)は、現存 9.5 × 7.0 ㎝、厚さ 1.9 ㎝の破片で、第10層より出土。凸面は、格子叩き痕を残し、その格子目は、対角線長 1.5 ㎝の長方形を呈している。端部には、指頭圧痕が残る。凹面は、比較的細かな布目痕を残し、端部に面取りを施すが、両面とも未調整である。



第９図　遺物実測図(4)

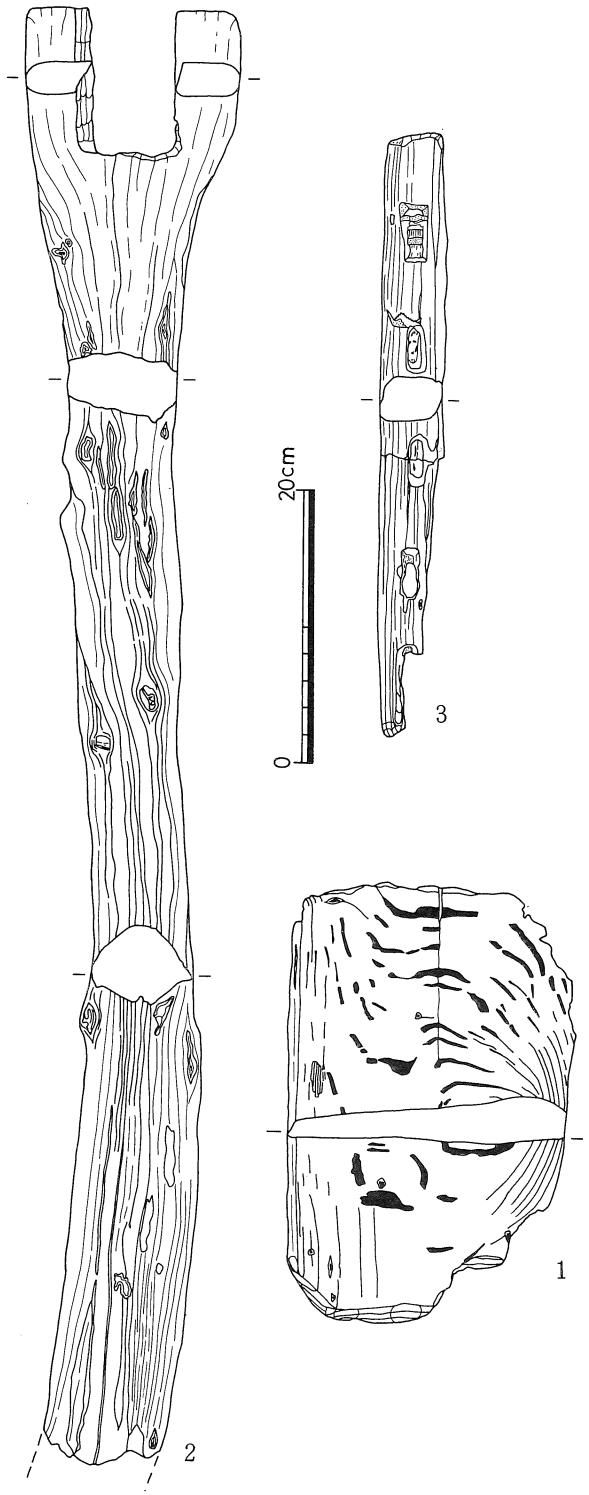


第10図　遺物実測図(5)

5. 木　製　品

木製品は多数検出したが、明瞭な加工痕のある木器は９点のみであった。

鍬状木製品〔第10図－１(25)、２(39)、第11図－１(28)〕



第11図　遺物実測図(6)

いずれも柄孔部は残っていないが、鍬の先端の一部であろうと思われる。第10図 1. 2 は全体に入念な面取りが施されている。先端部は両面から削って尖らせている。第11図 1 は側辺のみに面取りをしたと思われる加工痕を残す。第10図 1. 2 と同じように柄孔部は残っておらず、先端部は片面を削って尖らせている。

把手状木製品〔第10図－4(16)〕

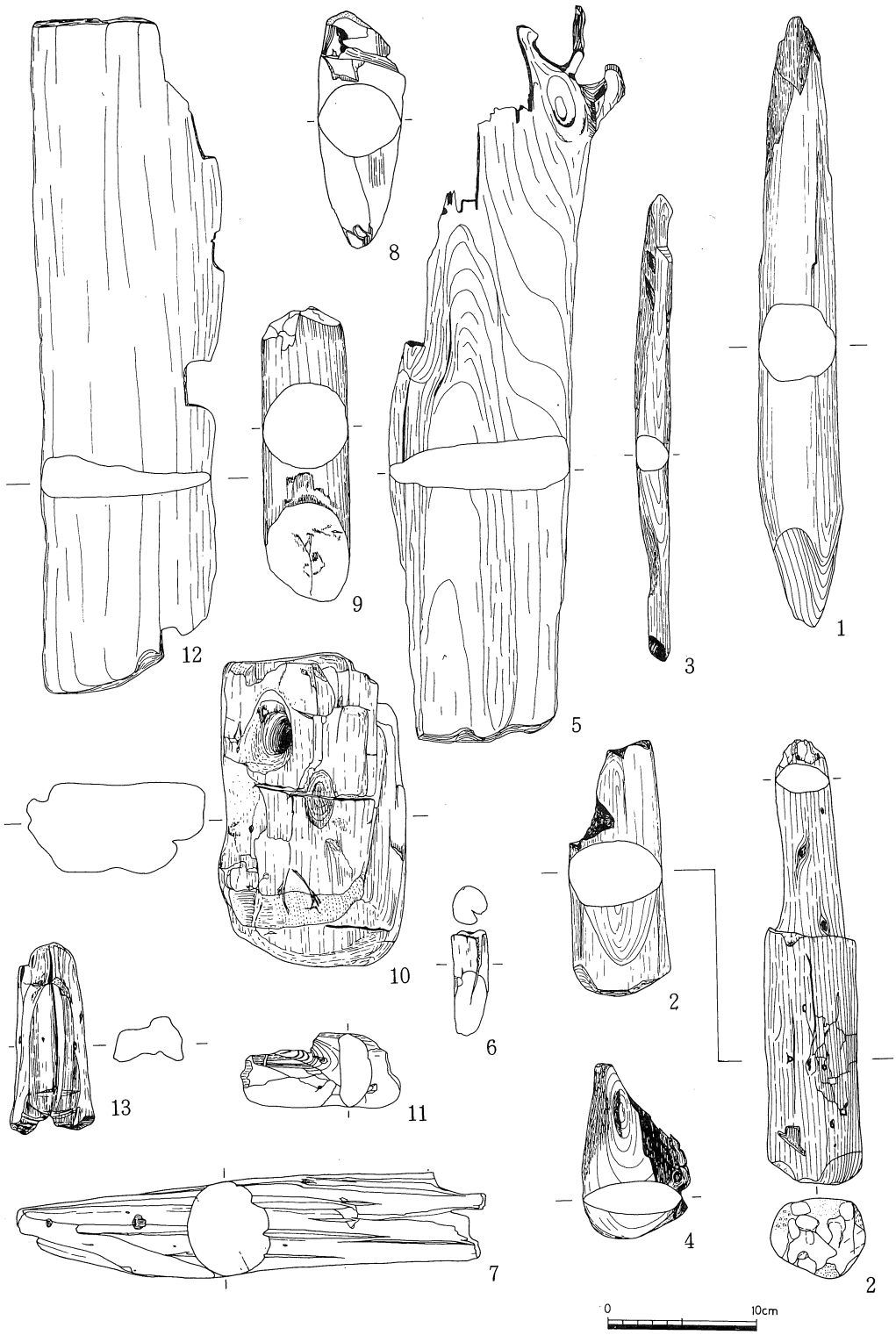
円柱状の木の中心部に方形の穴が二方から穿たれているが、一方は貫通していない。両端は加工痕が認められない程磨滅している。鋤あるいは櫂等の柄上端部に装着されたと思われる。

軸状木製品〔第10図－5(14)、6(18)〕

丸木材を使用しており、両端にこけし状の削り出しがある。6 は全体に面取りが施されているが、5 は削り出し部以外は樹皮を残している。

組み合わせ部材〔第11図－2(4)、3(22)〕

2 は先端部が「コ」の字状に加工されたものであり、そこへ別の木材を組み合わせて使用するものであると思われる。他に加工痕はなく、全体に樹皮を残す。建築用材と考えられる。3 は長方形の棒材で一辺 4 ㎝の方形の孔を一定間



第12図　遺物実測図(7)

隔に4個以上穿つ。2と同様に建築用材の一部と思われる。

槌状木製品

現存長約30㎝を計り、把手の部分は約3㎝を計る。先端部はやや丸型に加工されている。それ以外は加工痕が見られないほどに磨滅している。

そ　の　他

多くは杭状のものであるが、磨滅、破損ともに著しく、詳細は不明である。よって実測図を掲げるにとどめたい。

6.　その他の遺物

以上の出土遺物の他、獣骨（ Ｐ３８ ）、木の実（くるみ、松の種子、なつまめ、栗等（ Ｐ３８ ）が出土した。このうち(2)のように数条の擦痕が残るものもある。しかしこれらも今まで記してきた遺物と同じように原位置を失っており、いつの時代のものなのかは不明である。

▒出土遺物観察表▒

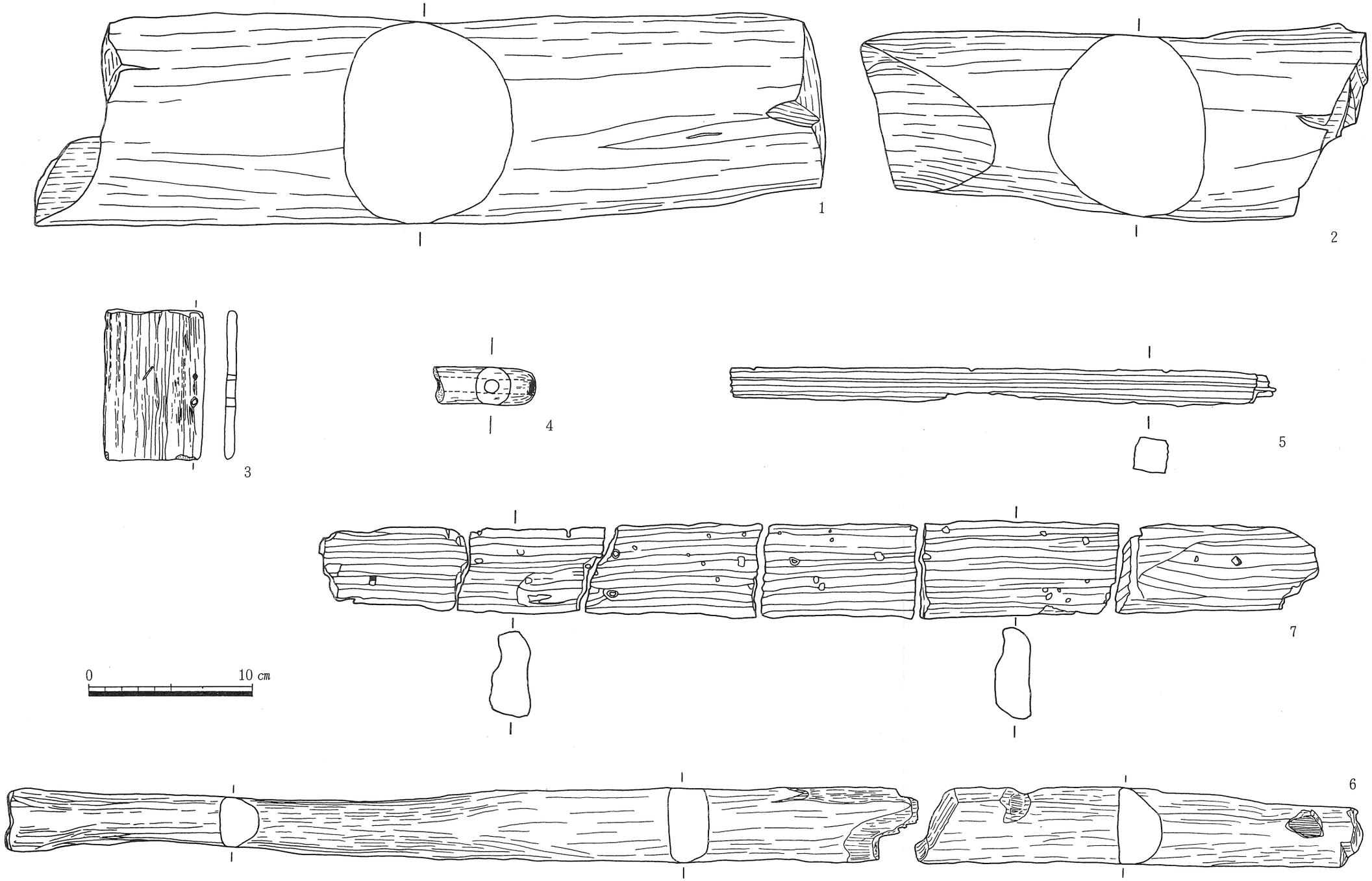
捜図番号	出土位置	器種	法量(㎝)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備　考
縄文式土器							
6−1	Ｎ６Ｅ７のＣ淡青灰色砂層	晩期				外　ケズリ 内　ナデ	胎土 ２～３㎜の砂粒を多く含む。 焼成 良好 色調 黄灰色
6−2	不明	晩期				外　ナデ 内　指痕あり	胎土 粗 １～３㎜の砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 黄灰色
6−3	Ｎ６Ｅ７のａ	晩期				ナデか？	胎土 粗 １～３㎜の砂粒を多く含む。 焼成 良好 色調 黄灰色

挿図番号	出土位置	器種	法量(cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
6－4	淡青灰色砂層	晩期				外　ケズリ 内　ナデか？	胎土 粗 1～3㎜の砂粒を多く含む。 焼成 良好 色調 黄灰色
6－5	N7E7のb 暗灰色シルト	甕 (口縁) 晩期	推定口径22.2cm	ゆるく内傾しながら立ちあがる		ナデか？ 内面の口縁部はケズリ	胎土 砂粒を多量に含む。 焼成 良好 色調 黒色
6－6	N8E7のb 暗灰色シルト層	晩期 底部	推定底部径5cm	あげ底と底部で端部が外に張り出し、それからゆるく外に広がりながら続いている。		外　指痕が残る (ナデ) 内　指痕が残る (ナデ)	胎土 2㎜位の砂粒を多く含む。 焼成 良好 色調 灰色 黒色(一部)
弥生式土器							
7－1	N7E8のd 淡青灰色砂層	壷 前期	口径 15.6cm	口縁はややゆるく外反し、頸部が「八字」に開く	頸部、頸部と肩部の境に各々2段のヘラ描、沈線をめぐらす	外面 肩部＝ヘラ磨き 口縁＝縦方向ヘラ磨き後ナデ 内面 口縁、横方向、ヘラ磨き後ナデ 肩部　多方向ヘラ磨き	胎土　密 焼成　良好 色調 表 黒褐色及び乳白色
7－2	N6E7	壷 前期		肩部にて器肉が厚くなる	二条以上の沈線が頸部と胴部との境に残る	外面 多方向のヘラ磨き 沈線により上はナデか？ 内面　ナデ	胎土　密 焼成　良好 色調 黄灰色
7－3	N8E7のc 暗灰色シルト	壷 肩部 前期			胴部に3条の波状と思われるヘラ描沈線をはりめぐらすが、一番上の線は磨滅し、はっきりとしない。	肩部にかかるところの内面は、ナデ調整 胴部の内面は、横方向のヘラ磨き。外面、肩部は横方向のヘラ磨き。胴部沈線の付近はヘラ磨き後ナデか。	胎土　密 焼成　良好 色調 黄灰色 外面沈線付近は黒色

挿図番号	出土位置	器種	法量(cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
7－4	N8E7のb	甕 前期	口径 26.8cm	口縁から下方に向け直線ぎみにすぼまる		多面は横縦の多方向のハケ目を入れ、口縁部はハケ目、後ヨコナデを施す。また内外面とも指頭圧痕が残り、内外面から同時に土器を指ではさんだものである。内面は横方向のハケ目後、ヨコナデを施す。内外面ともススが付着し黒色を呈す。	胎土 密（1mm程度の砂粒を含む） 焼成 良好 色調 外面ス ス着により、黒色、内面淡灰色（スス付着により一部黒色）
7－5	N8E7のb 暗灰色シルト	甕 前期後半	推定口径 22cm	「く」の字状に外反する口縁を有する。	頸部には三条の沈線が施されている。ヘラ	胴部外面ハケ目 他はナデ	胎土 4mmの砂粒を多く含む。 焼成 良好？ 色調 薄灰色に口縁部にスス付着 内面 黒色
7－6	N5E7のd 淡青灰色砂層	蓋 前～中		輪状のつまみをもち底面に向って大きく末広がりになる。		天井部外面は、上部側部とも指頭圧痕がある。内、外面ともナデ	胎土 2～4mmの石英、長石の小石を多量に含む。 焼成 良好 色調 灰褐色、一部外面にスス付着
7－7	N7E7のb 暗灰色シルト	甕 中期後半	口径 18.8cm	胴部上方に最大径をもち、そこからゆるやかに湾曲しながら下方へのびる。	口縁に一段の沈線をはりめぐらす	外面口縁部は、ヨコナデ、胴部は外面がハケ目、内面は荒いハケ目	胎土 密 焼成 良好 色調 外 黒色 内 黄灰色
7－8	N6E7のb 淡青灰色砂層	壷 中期	口径 20.6cm	口縁部がゆるく外反する。端部は肥厚して平坦面をもつ。	口縁部羽状文をめぐらす（貝殻腹縁） 頸部 平行沈線文櫛状工具とヘラによる三角刺突文	外面 頸部、ハケ目 内面 多方向のヘラ磨き 口縁端部 横ナデ	胎土 密 堅微 焼成 良好 色調 灰色 スス付着
7－9	N7E7のd 暗灰色シルト	壷 中期		口縁部は大きく外反しながら開く	頸部に櫛状工具による8条の直線文をはりめぐらす	外面口縁部に近いところはヨコナデ、頸部から直線文より下は、横方向のヨコナデ、内面口縁部近くはヨコナデ	胎土 1～3mmの砂粒混入 密 焼成 良好

挿図番号	出土位置	器種	法量(cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
						以下、横方向のヘラ磨き、下の方は、磨滅著しくはっきりしないが、おそらくヘラ磨き	色調 黄灰色土
7−10	N6E7のd 暗灰色シルト	高杯型土器?) 中期以降	脚径 9.2 cm	杯部は外反しながらたちあがり、脚部との接合は、きつく曲がる。脚部では、再びゆるく外反しながら広がり、端部でやや肥厚する。すかし孔は高さ2.5 cm 底面の長さ8 mm	脚端部に一条の突帯をつけ、脚部に3 cm余りの間隔をおいて透し孔を設ける。	杯部外面は磨滅激しく、はっきりわからないがナデか？ 内面はヘラ磨き、杯底部はナデ 脚部外面は同じく磨滅激しいがナデか？ 裏面ナデ すかしはヘラ状工具によりつけたものか	胎土　密 1 mmの砂粒を多量に含む 焼成　良好 色調 内外面とも淡赤灰色
7−11	N7E7のa 暗灰色シルト	高杯 中期以降				円板充塡法 杯底部外面ナデ 一部指頭圧痕後ナデ 内面ていねいなナデ 脚中部、外面ヘラ磨き 内面中央から下にかけ、ヘラ削り絞り痕が残る。	胎土　密 焼成　良好 色調 淡灰色
8−1	N8E7のa 暗灰色シルト	甕		やや張りをもつ胴部		外面 ハケ目後ナデ、ハケ目の痕跡をかすかに残す 内面　ハケ目 下部ハケ目の後、ナデを施す	胎土　密 焼成　良好 色調 外　黒灰色 内　黄灰色
8−2	排土中出土	壷又は甕の底部(?)	底径 9.4 cm	大型の平底からやや湾曲しながら上方へのびる		外面 ヘラ磨き 底面近くに指頭圧痕 底はナデ 内面 磨滅のため不明瞭 底面がナデ、立ちあがるところヘラ磨き	胎土 1〜3 mmの砂粒を含む 焼成　良好 色調 外　黄白色 内　黒色
8−3	N6E7のb	壷		頸部、肩部の器肉が薄い		成形は不明 調整はナデ (頸部内面は横ナデ)	胎土 密にして堅緻 焼成　良好 色調 外　黄灰色 内　暗灰色

挿図番号	出土位置	器種	法量(cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
8－4	N6E7のc 淡青色砂層	甕	残存最大径 23.2cm	胴部に突帯をつけ、ヘラ状工具によるきざみめをつける	きざみめ	内外面ともヘラ状工具によるみがき	胎土 1～5mmの砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 内、黒灰色 外、黄灰色
8－5	N7E7のb 暗灰色粘質土	甕底部(?)	底径 5.8cm	底部よりゆるく内湾の後、外反しながら上部へたちあがる		外、内面ともに土器表面の磨滅が激しくはっきりした調整はわからないが、内面は指頭圧痕あり。 外面はヘラ磨き調整ではないかと思われる	胎土 2～4mmの砂粒を多く含む 焼成 やや不良 色調 外面 乳白色 内面 乳白色 (一部赤褐色)
8－6	N7E7のa 暗灰色シルト	甕の底部中期	底径 6.6cm	安定した平底からゆるやかに外反しながら上にのびる		外、内面ともにヘラ磨き、指頭圧痕あり	胎土 1～5mmの砂粒を含む 焼成　良好 色調 淡黄色 裏面が一部黒色
古式土師器							
8－7	N7E7のd 暗灰色シルト	古式土師器(小谷式)	口径 12.8cm	「5」の字形の複合口縁を有し、整正な複合口縁を形成する口縁は、直線的で外傾する。頸部は強く屈曲し、胴は倒卵形	肩部に6条以上の波状文があり(櫛状工具による)その下はヘラ状工具と思われる刺突文を有す	口縁部内外面ともヨコナデ、多面波状文より下は、多方向のハケ目、内面頸部はナデ　以下ヘラ削り	胎土 かたく密 焼成　良好 色調 外、黒色 内、灰色



第13図　遺物実測図(8)

Ⅳ 小　　結

以上、タテチョウ遺跡の発掘調査についての概要を記した。本遺跡は県下で有数の低湿地遺跡であるが故の湧水や調査期間中に朝酌川の増水により調査区が完全に水没したことなどにより、調査は難渋を極めた。決して十分な調査とはいえないが、遺物が若干出土したので、今回の調査で得られた成果についてとりまとめ、結びにかえたい。

まず、遺構はなかった。土層を見ても砂層と粘質土層とが交互に自然堆積していたにすぎなかった。各種の遺物は第６層から第14層にまたがり、その下の第15層は多量の貝の死殻を含む無遺物層であった。

各遺物は前述のとおり、土器では縄文式土器の晩期の粗製土器の破片が６片、弥生式土器の前期の壺、甕、蓋形土器の破片が６片、中期の壺、甕、高杯形土器の破片が７片、弥生式土器の時期不明の破片が15片、古式土師器が１片であった。

他に木器類（明瞭に木器と判断できるものは、鍬が３、槌が１、把手と思われるものが１、紡織具が２、建築用材が２）、獣骨片、種子類等が出土した。これらを島根県教育委員会が昭和52年度と本年度調査した成果と比べてみると、質量ともに非常に少なかったといえる。検出された土器の割れ口などには摩擦痕が認められることや、大半の土器が小さな破片で出土したことは、近傍より流失し堆積したことを窺わせる。また、これらの遺物と堆積土層との層位的な関係は無秩序であった。

ここで、当教育委員会の調査区のすぐ西隣を調査した県教育委員会の本年度の調査成果について付記しておく（注①）。層位は第８～13層に分かれ、第９層は再堆積層で、縄文式土器、弥生式土器、土師器、木器、石器などが混在していた。この第９層は調査区の北西端部にのみ認められる層である。第10層は西半部にのみ認められる層で、縄文式土器、弥生式土器、土師器、木製品、獣骨等が出土した。多量にまとまって出土した土師器の検討により、第10層は古墳時代中頃に堆積した。第11層土層は全面に堆積しており、弥生式土器、土師器、木製品、獣骨等が出土し、弥生式土器は中期から後期のものである。第11層下層は貝殻を含み、木製品を中心に弥生式土器、獣骨などが出土している。弥生式土器の検討により、第11層下層は弥生時代中期から後期にかけて堆積した。第12層は縄文式土器、弥生式土器、木製品、獣骨等が出土し、縄文式土器は晩期のものが、弥生式土器は前期後半から中期前葉のものが多い。このことより第12層は弥生時代前期から中期前葉に堆積した。第13層は無遺物層で、当教育委員会の層位では第15層にあたるものである。

この教育委員会の調査成果と当教育委員会の調査内容を比べてみると、前述のように、県教育委員会の調査のようにはいかないことがわかる。

また、松江市の調査区には、県の調査区でいう第９層や第10層や、第11層下層の貝殻は存在しなかったし、出土遺物の質、量も松江市の調査区の方が非常に少なかったといえる。

以上のことを総合的に検討した結果、層位、遺物の質、量及びその出土状態より、本調査区がタテチョウ遺跡の範囲の東南端附近にあたると思われる。

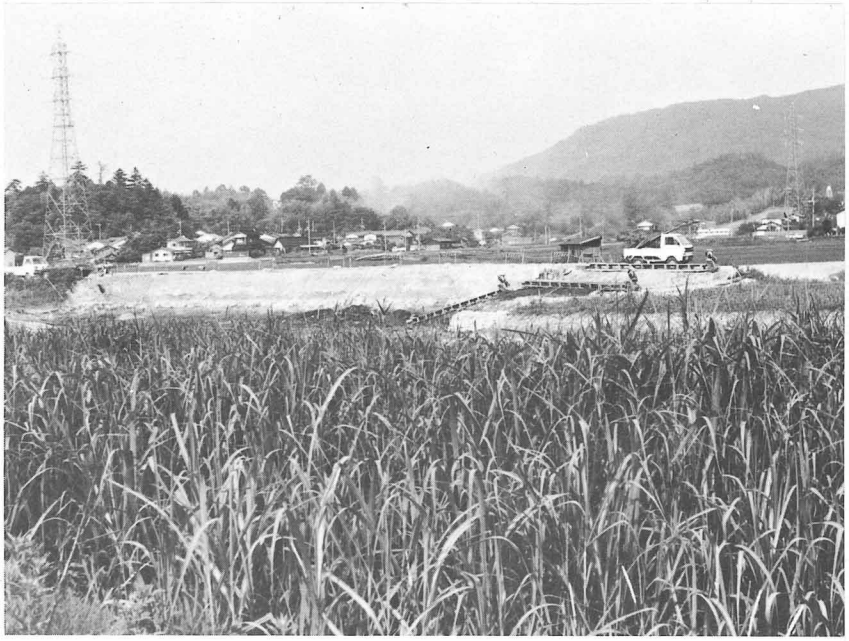
▒参考文献▒

○島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う　タテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
昭和54年３月

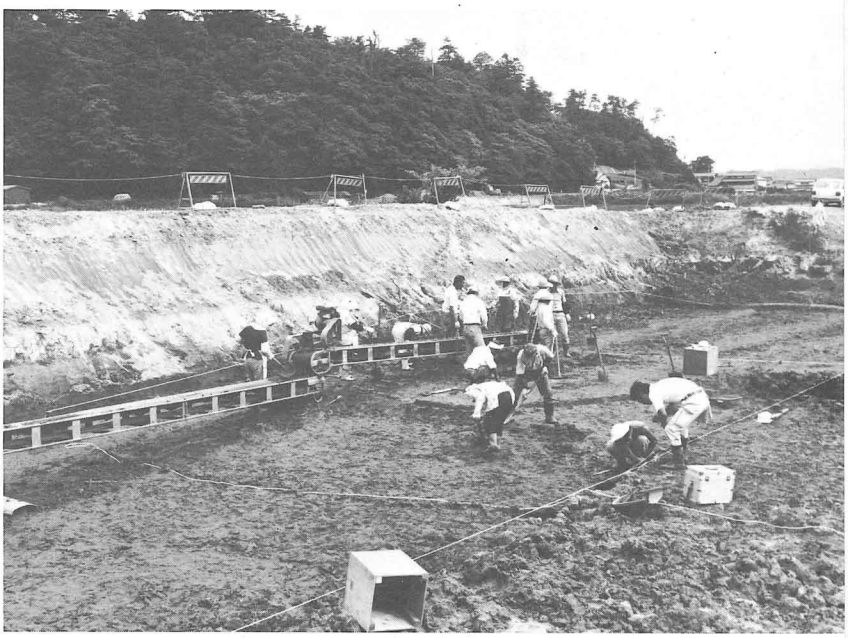
○建設省松江国道工事事務所　島根県教育委員会　『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』　昭和58年３月

○島根県八雲立つ風土記の丘資料館　『八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅰ　弥生式土器集成』
昭和52年

○青木遺跡発掘調査団　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　昭和53年

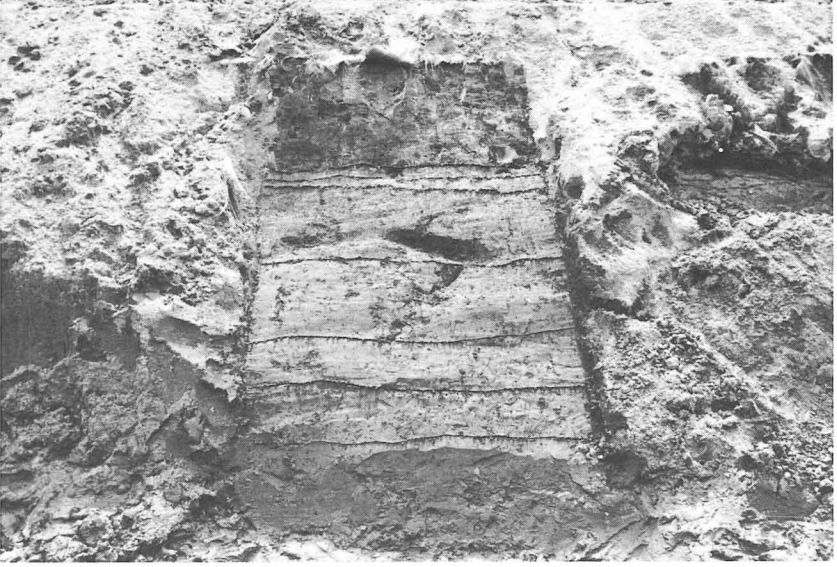


調査区遠景

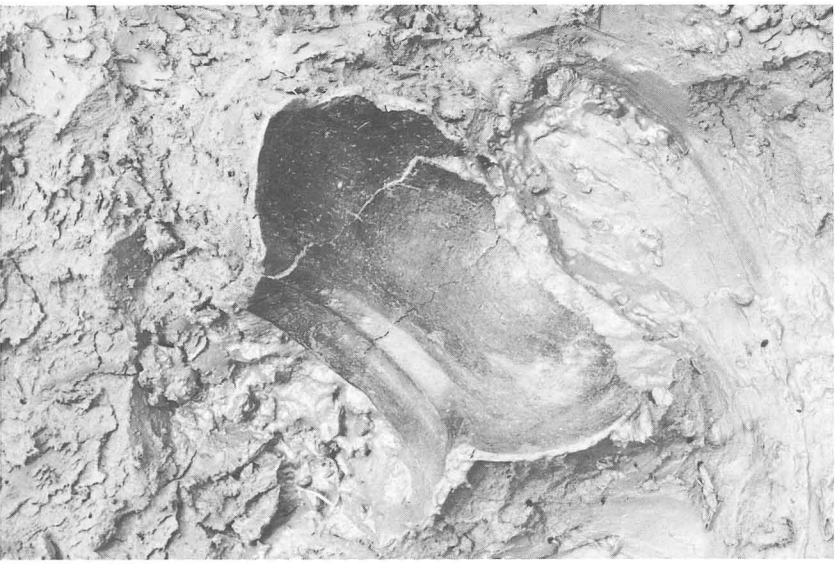


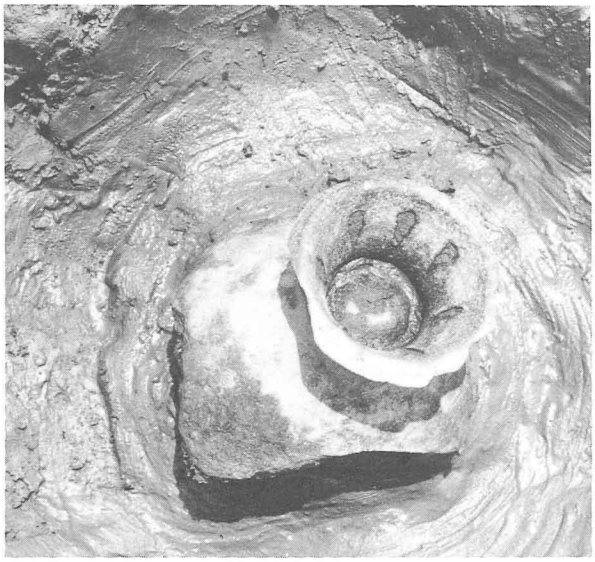
調 査 風 景

調査終了
（南から）

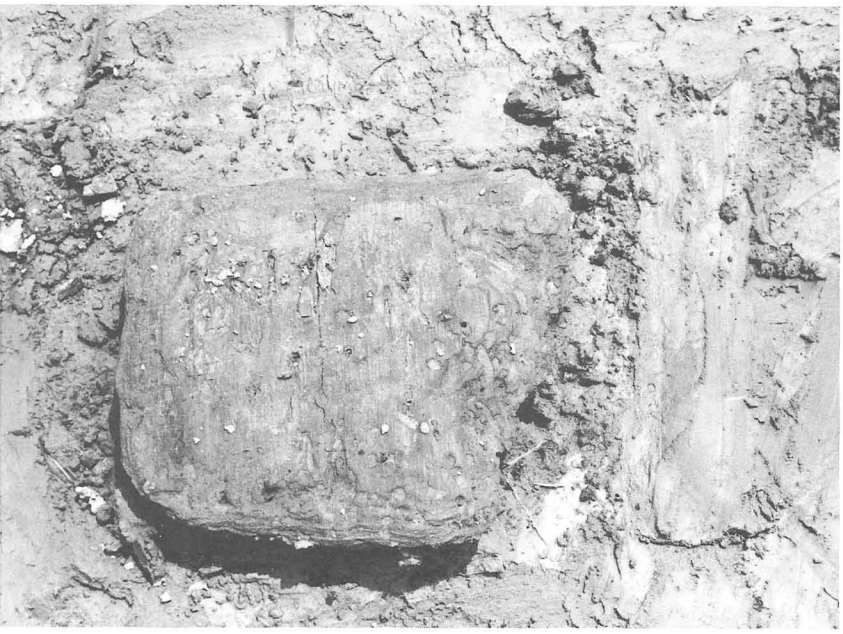


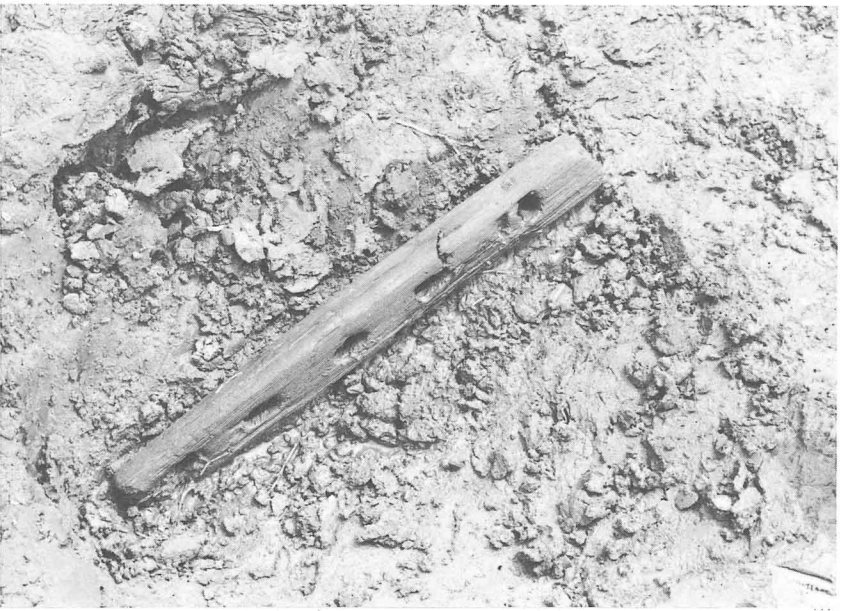
調査区東壁の土層





木器出土状況





木器出土状況

6図－3 (4)

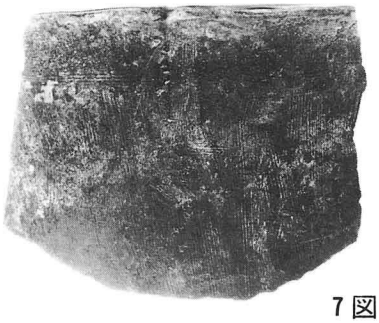
6図－1 (8)

6図－4
(出土地不明)

6図－2 (27)

6図－6 (15)

6図－5 (25)



7図－4 (10)

7図－1 (37)

7図－5 (36)

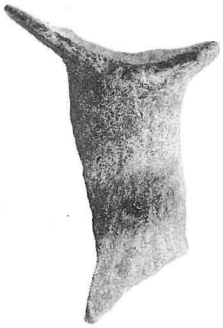
7図－2 (3)

7図－6 (17)

7図－3 (16)

7図－7 (28)

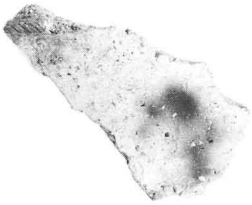
7図－8 (5)



7図－11 (24)

7図－10 (22)

7図－9 (31)

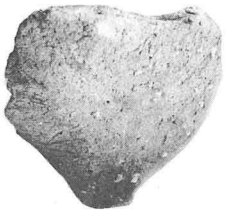


8図－4 (7)

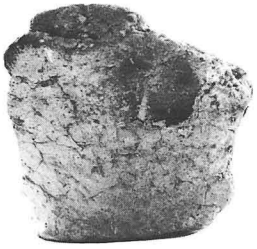
8図－3 (6)

8図－1 (14)

8図－6 (23)



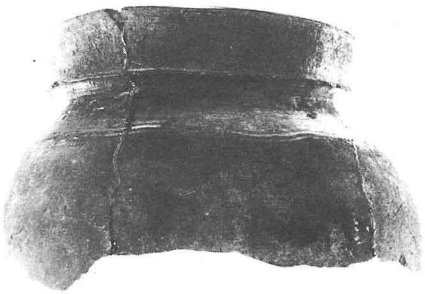
8図－5 (26)



8図－2 (23)

(9)

(35)

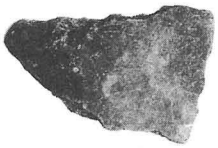


8図－7 (30)

(12)

(出土地不明)

(出土地不明)



(18)

(2)

(19)

(21)

(13)

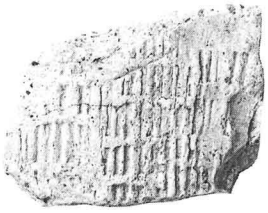
(20)

(1)

(11)

弥生式土器　8－1. 2. 3. 4. 5. 6. 7　(1) (2) (9) (11) (12) (19) (20) (21) (35) (出土地不明)
古式土師器　8図－2

9図－1 (1)



9図－2 (2)

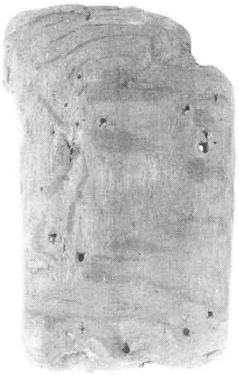
瓦

11図－3 (22)

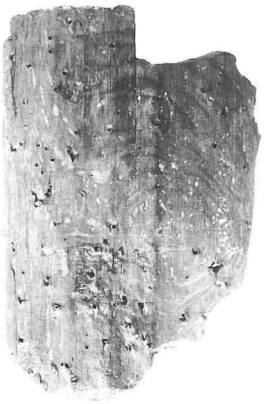
10図－5 (14)

10図－4 (16)

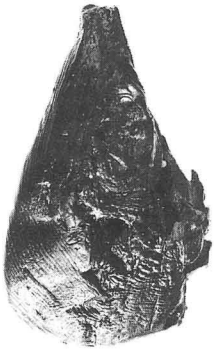
10図－2 (39)



10図－1 (25)



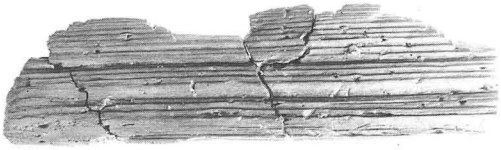
12図－10 (29)



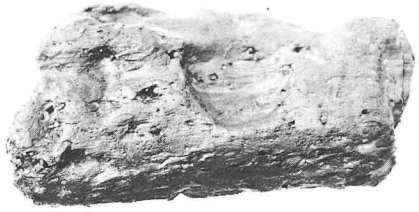
13図－7 (23)

12図－2 (19)

木製品



12図－12 (33)



(30)

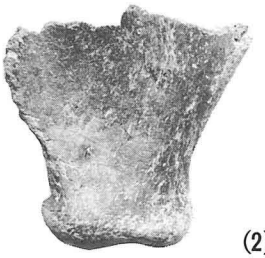
13図－5 (21)

13図－1 (28)

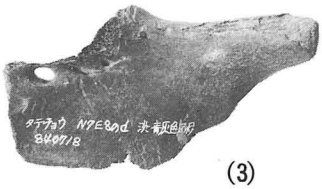
12図－3 (20)

木 製 品

(1)



(2)



(3)

獣 骨

(1)

(2)

種 子

タテチョウ遺跡

昭和60年3月発行

発　行　　松江市教育委員会

印　刷　　有限会社谷口印刷

松江市母衣町89